





平治物語卷上



ひうめよれそんみきそ三皇五帝の國を治め  
に  
あはれ民をなほりみまあまうはる物をみて  
あふ但し身をあまみて禄をうく家故也  
君臣をえらんとて友をさけけしをのまをもう  
て職をなくふ時を但かくもあうしし成敗せむ  
ふ事一あせすして化すといへりあのかゆ  
る舟航乃あは海をまふかあふは機織の如  
きうり鴻鵠れはる書を志れを必羽翹乃羽り  
よふ帝王の心をたふむかあふは臣弼乃たすけ  
りよ頼と云くくに乃臣輔を必忠をなまの任



彼を人として時を天下をのけりておき満りと  
思ひたりしやへりりしやいして流て王者  
の人心を盡すや和漢を朝国しを又武二乃とも  
てさ記とひ又とりてを可憐のまほりことをた  
すけ我をもていば夷北乱をあらむ天下をたも  
ち必ち強治むりてくくりこと又我た小し我を  
ふりてと忍びたりれとて人のあさけのち  
つあつとひとけりてさうなひううとあ端  
りてあつと時四時風波乃にうれあくハ甚民虎  
乃うきへりそれ流雪ふ及ひてい人おこてお  
城と夢也し民だけくして堅心をうもさむ

よく勇ます人志む押賞せらるるきき勇士なり  
さきハ唐の太宗又皇帝を殺せよきておきり  
殺し血とふく忍びきと呪て我士をさてしとあ  
んハ忍のたあはけり人今を義ふりてりりり  
くれハも我あつとんしとてさう守兵死とい  
たうん事一代のこ思へりたりとるんし  
身をあらしとれとてくうりもほこも人よ  
志とりてこせハ人みさきき又後備北徒ハ  
関の蟲賊より榮花ととたりあううひせい  
を市おさきりあその諂諛乃をうこをりて忠賢  
のものをかうとよあつ事しをふくも其制邪乃志



をりいひて留美乃わきふにうさうとをう  
らむあまみふ怒志のあうひ也用持す（きさけ  
事）ありあくは近來控中御と道中を持大吏は  
海門邊者原ね長伝頼ひやう人ふさ人長乃担  
天津兒を振寄乃に苗裏中国白乃隆乃八代後胤  
橘慶云伝季隆りゆに伴鑑三位伸隆り子なり志  
り建武久とあうす茂ふとあうに終とるく藝  
もるうう親皇ふのこうこて昇金よめうう  
そ又祖ハ祐國乃更取をのこ登て年ハけよとひ  
めいふふてのち日月うふ道三位まてくといこ  
里しうあまき近海月遊人歌后宮く司宰お中

ゆ海府登換帳遠使別當あれうをわつう二三ヶ  
年のあひいさうへのふてう七女うて仲納  
ふた海門邊ううこまり一此人の家嫡を、こ  
うあやう乃昇金ハ志終ふう凡人ふをひてい  
いまううく乃くく此例をきうん又友達の男  
ふあうすき録もな銭公乃まうやうくのこる介  
まううくとく不呈——て家よたえく久しき  
大匠大納りし皇をうけくをうそあけあきふ  
あまうひをうこ志きりさまうこう人同をふこさ  
さう者群をなと人あけ微子那ふもまき安禄山  
ふもあえたり好桃の鬼をもたうまけうう榮苑



乃東よりうかへりきつを以て勅せ入る儀と  
しふそのわり山升三位永頼に八代後醍醐天皇  
番隠り申こ島羽院に字金士為人実直り又儒  
風をうけて儒業成に人すといふも詔に  
學して詔奉ふとて九流百家より  
子書世無双乃宏戈博覧あり及白河上皇此に乳  
母紀伴二位れまゝより保えく年より  
これより天下大小事皆人のまゝより  
こゝにて絶つる詔を詔をさすといふ  
詔の例はまゝとて大内少記録事をくき理  
を勅決可聖なりといふ人なり

ものごらば世に傳ふ小御君を竟歸といひ  
しなるは天曆乃二朝よりと義懐懐成  
り三年よりとあるなり大内少記録事  
をさすなりかゝる金飲危しし描圖意  
をなすき難免のなりといふなり  
のなり小造是志て遷すなり外擲重  
大極なを樂院詔目八省大學寮  
すてゐるなり横くもこれ大慶乃か  
切なり詔を以て不目なりなり  
月よりひとくといふなりなり  
萬すまふの詔なりとて詔を  
なり



法のあうひお里よあれてあひもよがはれ九重乃  
儀或首ともちを新奉一此礼法ゆりさうあう  
さんわの保え三年八月十一日至上位とす  
へらせ給ひて後子のうやよゆたり中うせ給へ  
里二條院を介りあうきと信あり控位と孫藏と  
おふひてうふ鳥もゆち草木とるひをさうりさ  
里又信頼は乃虎を之頼りやめつうあよ一て崩  
とあうゆり人とる一まはあ雄を必あううふさ  
らひさううへりうう天魔り二人乃ふよりの  
うもりきん其中一あく一てことよふきそ不  
使乃うーやうきり信あり信頼とみてゆ頼ふも

け省天ととあやふめ開家をもみさうんよら  
仁とゆりひたれさりうも一てうーさう  
やと国人ととあ時無双乃虎居さうう人乃公  
も一里ととたれさうりてけて下ありすへき家  
あう一信おてあうもとたあらひ若かり信頼も  
又あま一とんのましくさうりい入乃まれ物こ  
もんで恨とむとんそのうさうら一と思ひ  
てたれはりううらとらうりことおとめうし  
ておしまりんとそにうきうあう時信あり  
むうて上望ゆりけうハ信頼う太ねをのうこ  
やハいふうならぬ志も重代清範の家りあう







ちんや道徳大將おや三ふい列されとも大ぬ  
とけるさう長のとあり執柄の息莫や乃實とふ  
職を先途と信託する、うすとりて大ぬをけり  
さハふおころときをめて豫選れとるり天の  
ためふりろがさまゆりんぐというてうふひん  
おにりめさまそく人さといさめや多れとを  
ぢふりとたがー一知ーうう流気色とるー信如  
おまり此物并あるさう唐乃妻録山りむこまう同  
を陰よりさして海き物三巻をけり里て院へまう  
せられ此君あるけふととた屏ーめーいん流  
事ーとすく天氣他よこととるり信託踰ハ通入

乃うさんくふさうことをまきくても  
うぬこととおおりのけきまつてり一不芳や号  
しお仕とせす伏見の深中御を仲仲心成あひ  
かさうらう枝立所しこりりぬとるり一のりもせ  
むき早足ちうりうとひん小茂藝とそけいこ  
せうまきうあま併信如成うしなるんだめ介り  
子息新侍道信親成大氣流盛乃聲よりてらう  
所さより平家乃武藏成もておさなとまんとた  
もひきうり信盛ハ太宰大氣たあう人太田あう  
た結う一談みま物果とるうありううあうま  
しきまればも同させーと思ひとくまうたる



頭義朝と保元氏見たれ以後平家より抑えて  
抑えてやむく存するものとおとられ道統  
を承継んぬるは志わうかよりきり常々きん  
さむの度ゆ信頼くして作人の國おもを  
重く友か階ぬもりさまんは天氣も子細あり  
しとつたまふやうはゆきよくけられぬ糸  
身ふくても大變ありゆりゆり後大事とも取  
一方はうきめやさんとうきひけりとのこ  
らに當帝は外戚新大納言源宗村をわくらひ  
中門前中一助を寵成ゆ乃三男越後守一守成  
親朝は君代にきりきりきりきりきりきり

沙乳人の別當惟方をもつたまれきり中おとひ  
お當の母方の叔父よりあふり牙尾張守信  
俊成解する一守更あううきられきりきり  
りきりきりきりきりきりきりきりきり  
けりなりと小平治元年十二月四日大武清盛當朝  
ありきりきりきりきりきりきりきりきり  
乃きりきりきりきりきりきりきりきり  
信頼は紀伊二位乃史よりきりきりきり  
を公のまきりきりきりきりきりきりきり  
なりきりきりきりきりきりきりきりきり  
きりきりきりきりきりきりきりきりきり











うゝ言のうきめさゝるきうゝうきをまゐり  
や大抵無きうきをまゐりしめを中きうきをまゐりし  
く歩車りしめをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
もひきつた所よりまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
うきをまゐりしめをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
りしつらうきをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
所より押さへめをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
判官素實道を依りて君とけ守護志をまゐりしめを  
け重威ハ保え乃乱乃時も讃岐院の仁和寺の寛  
通法勢り坊より後らせ給ひしし誠志護りし  
て讃岐へ流配源ありしうきをまゐりしめをまゐりし

まゐりしめをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
らにらん人々の中ありし三乗殿の西の海より  
おろりし門よりまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
りしめをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
わくふ跡殿上人つや孫乃女房よりしめをまゐりし  
まゐりしめをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
せきりありしめをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
あたりありしめをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
りしめをまゐりしめをまゐりしめをまゐりし  
わくどひ入られしめをまゐりしめをまゐりし  
たうらゝ水小おろし中よりしめをまゐりし



死しうへを火はくもやけられ焼くうへに  
ううあ舎のもけしきうせはふさうえられて原  
野地よりわくも一里たれハワううの者うたに  
めうへきうの何層の尖とあけ古妃宋女の方を  
かりかひくとあうりあふは仙洞乃回祿ふた月  
に雲客乃命をなとせしと浅ゆたれた雲傍射  
大に敵仲右衛門尉平康大実と嘉期とあせきた  
くうひきかうはわううと建てければ敵仲康  
忠う領を辨乃さきふつうねき大内へともせあり  
待賢門まうあけておめささけひう外ハ志  
いこーくうことうるは同ー乃刻は信あり

宿水婦小路お洞院をさーよせて火城うけたれ  
も女まうもへのあそく海よひおけつをも信  
ありまうとさうへてやりまうんこそあかく  
乃そのとき里させまり保え乃乱己後ハ理世安  
樂ふーて都鄙戸さーと忘ま欽姫持裏ーて上  
下乃屋をあうーハ火災の餘糧は民屋あかく  
かりひまうハあけいふまりわう世中うい二三  
年ーと洛中群更志はうーて甲冑をううひら  
築ま帯まう者もなりーうあふくああり  
くひともうくうりまあはうーうありーはい  
ハ兵とも京白河はみちこそ里ゆくすあいの



あるべきとあけかぬ人もふりきりかゆき入る  
伝わり子見五人國友せし頼子新宰相後憲次  
男橘慶中 将成憲控太中并負憲義忠かぬ長憲  
信濃も雅憲あり上り名苑山院大納言忠雅職り  
ハ義人右中并成頼とせげし——さうなりし  
太政大臣太右大臣内大臣以下上り衆肉志勢ハ  
——る食後あて伝わり子にたつ子らるし  
よりまの中ね成憲ハ太宰大貳信盛の聲あれハ  
りや命たすか頼とて亡りるあられきり  
きりと憲名とて内裏よりあきあきしめされ  
られさか及りておられきり博士判友坂上通成

ゆきしりし成憲成しけしと内裏へありきられ  
あわれき子おわりとて通成——頼けをかりし  
右中并負憲ありととり物法中ふりてしきり  
りあひたりきりと宗判友信院よりひりし  
して別當ふりたりしハあきも信院はあけけ  
られきりやうて藤原朝こまはる信頼ハもと  
ころこのそとをうけたりし——うけ大臣大ねと  
藤原のききたる頼義ハ橘慶圓を捨てしり藤の  
うきよるり佐治氏子太史を信濃守りしうき  
田義人大史源頼範橘津也より源通經ハ左衛  
門尉より康忠ハ右衛門尉ふり足三郎を



基ハ大なる先ヨリ子孫田次帝政法ヲ善傳授リ  
テリテ政家と改名ト今度乃合戦リテウラウラ  
ルハ上総國と銘人ト云フ一重ハありあゝ義朝  
ノ嫡子鍾倉源太親母乃祖父云浦歟之  
と小わりきりなりト云フ事一ありと云フて  
戦戦うてツセ乃なりきり今度の隙同ニ集り  
あふ伝頼不さリテ云フんて義平は除目小  
集りあふと云フさいふあれ大國ノ小國ノ友加  
階之田ハ乃ト云フて云フむへししかぢんもま  
うと云フまづと云フと云フ義平中云フと保元  
伯父鍾倉ハ云フ船を宇治河の浦前ト云フ義人小

ふと云フ多れと云フと云フちと云フと云フと  
中云フハト云フと云フ義平ノ勢主給里ト云フ  
安甲登リテ云フむつひ清盛ノ下向戦まらん  
と云フ清盛も云フと云フのがらん云フをまん中  
と云フと云フて一云フと云フと云フと云フと  
むと思ふと山林を云フと云フと云フと云フと  
と云フと云フと云フと云フと云フと云フと  
り無て其後伝頼云フと云フと云フと云フと  
と云フ大國も小國も友加階と云フと云フと云フ  
と云フと云フと云フと云フと云フと云フと  
つと云フと云フと云フと云フと云フと云フと



はけうれて作へるなりと乃西源太までいふんと  
う中きへ伝教義平の丁状意儀なりと云う人安部  
望まてふれ是流わく町て何うせんらやこへ  
つれて中よれこめうん正らりなりとやあり  
つきと意ひ多れをみまけ義よあにかたれなり  
ひとへようん乃つききりゆ人よりと太政  
大臣伴通ふをあるハ左大將りてたりにきりり  
支学優長小して忠節もても帯ふなりときこ  
とやさき多れハ君も臣を扱ふきりりきりり  
終ひつわうひも奥ともよかりきり内裏より  
衣士世志いりり事りきりきりきりきり

いりり友か階をうり人成あなくありりたふ  
もりりわく友佐をうり人わく三條殿の升と  
ぬく人ところたれり其升あけ友をうれ  
わくときりりれきりり通憲入るところ  
られ多れともゆふをうりりきりりきり  
は信あとりも南家博士長の守言階後り  
なり大業もとけを儒友ふも入られきり  
あきりりありりて并友もあきり月向き通憲  
とてゆきりり後ゆ人わくきりりきりり  
お家あけふゆりりあへきりりんとてひん  
ききりり小賢水小面像をえきりり乃前劔乃前小



のてむ御くくるとりふおねありをくろき  
思ひけつゝの言致あつふよそ無聖へとありきり  
物す王子の法まへよそお人りりあひたり過  
憲をきておしていくは過を法た乃女人うな  
但可首勅の記よりわけて衆命と草上よさる  
すといふおのあつをりうふといひて一く  
ねしきりりわくすあふあふりうそま何  
まーもたうそさ里をまは過憲えこ思ふうとそ  
あけきけふううれとけいふしてうのあつへき  
とりふといさお家してや乃うまじすくあそれ  
えそ旬ふあまういひてあふんとういふさそ

ふと下向して法前へまよりお家乃志はり日向  
乃へ乃とよとまんハ無下りううそてあつあつ  
えいおあつて法ゆゆりうりあつやと中り  
れそか納言を一人もなりうとてさうあつ  
とりおろさぬ友ありいひてあらんとおあせら  
まきりやうくくちて法ゆゆさき法義里  
やうてお家してかあつ入る伝あつそいひり  
あ子そ或中おあつりいこ里或七并よあひあつ  
もせてゆくーりりー法あつすこそあつ  
神ー男をり色くも衆れ命法聖への草り  
をきり衆志も唯自のたのーひきふれあつーひ







いふ又わりあはし君むこふ時ハ長弱をわこふと  
きい君ふくくふんといひつりいふ長たこて君ふ  
もくあふ世新ふるしし忠臣さふふかばふと  
云々わうらくハ我ふりへししと思ひさわくふ  
十日のあふ六太衛門尉成宗といふ伯を免て  
朝乃わこは御事りあみせりへれとてこ  
けうふも成宗ふりりり来てちせめれくは小  
幡ううけりて入た乃舎人成宗といふ長所ふ  
史のて後藤門系向へときくくあふくくく  
ふんとてこふきふふふふふふふふふの中  
ふふこ里婦小治の成宗ふを焼くふれはぬ是

ハ右衛門尉成宗ふを焼くふれはぬ是  
一門をわうりし治ふんとくくくくくくく  
成宗ふ其ふ一城はけふふふふふふふふ  
里ふとせは下膳ふたりくくくくくくく  
りりふんと思ふをわいふくふりたり春日山の  
奥はふ乃ふふふふふふへて成宗ハ京への  
かふりふふと田原乃たふりあふり入るふけ  
中をせふふふふふふふふふふふふふ  
ふもたふふふとわいふふふふふふふふ  
ふふふとわいふふふふふふふふふふふ  
ふらんふふふふふふふふふふふふふ











う叔しやりて後二位一

二

一位どう

きり信あり書きたりてしき拙なき中り  
唐僧來て生身の親者なりとて相ふり事あり  
をゆ人い久壽二年乃冬のあり鳥羽禪定法皇  
熊野山に清衆あり其以那智山に唐僧  
あり名ふは漢滿沙門といふ彼僧吳國にて目れ  
けりすとすてすして生身乃親者をおうきやらん  
といふ然れにあり天ふあふきて一子目乃あひ  
た初禱をふり子目は滿きり教るんち生身  
乃親者をにきまんと思はく目城はゆきて那智  
といふ所なりをもむけといふ天の示現をう

あり後海の中里城をけて彼山に衆發せりあり  
法皇はよりきりて唐僧をめぐりてまき  
法皇へきり相商く孔と唐僧あれと語ひき  
きりしめ人ありきりて唐僧のいなきに  
あり法皇の來座よりいきりて禪加は法皇除淨  
精まできりきりて人々唐僧のいなきに  
ありす弘撥破戒後除大精まで來りたりとこ  
うふて唐僧はこれとをきひて文學の  
と法皇よりきりて思ひきん吳國の事一城とい  
うけたり震旦の長安城より天竺乃舍那大城を  
て何處里そと向ふは十萬餘里に遠きと云



てゝあいにくまうあり天台山　りあへさあ  
七百里白樂天乃世を乃くれふあうーとこバ  
ふまけ唐僧旅儀ととんとやあひひきん扁鵲  
り門ふけふふりありとりふ延命とりふ草と  
へちりあまを思ふ人吾代まきき懸張さけあ今  
ひさくくのふとりふ女陽り門ふけふあう乱  
樹とりふああり三十五年ー一交あさえちふ  
苑さ記乃校ふけこれまうあまをとりてくふ  
人醉華　百餘日そのあうまひあま母う枕ふく  
たり長良園といはけうう城よりううふへさ  
ふーと二百里也梵王のううう三百年尺乃る

腦の塔あり一の塔乃りくふけ摩訶曼陀苑はり  
まんまやーやけは種乃てんけひけたり種  
龍龍仏乃こりとりてうきをあらし流ひ  
所也大富山ふけ葉葉王とりふあま被束の葉  
哉つゝみりぬきてううをきく人不老不  
死乃徳張えたりあ山ふけ飯珠とりふああり首  
よりりろく乃賊張いうきつ子り仏張を  
やうあまありひあり長山ふけ三室乃龍あり  
枝龍の水とのむ人大きりいかりんあまさま  
そえ竹るは鞭打る乃んともふかすといへり孰  
史琴を弾せりうけは田方乃ううううあうり



欽宗筆紙ふきあつて天人神代ふたりるを唐乃  
太宗ハ甕のうとりふして天下をねさひり先ね  
ありと一こりこころをまは唐僧より西より  
うこまらるるに國より来て学せらるるこころい  
もとよきまれば國の素生あれども其遣唐使小  
や後らひすらんて天竺震旦高麗新羅百濟と  
そそりて五六箇年北君ふり一人よりあまあ  
民のゆく人いふこともよく学あに教ありとこ  
たへ多れを我生身の親着をねり見きりあて天  
乃示現とてうりてあまきまてさそきり此則生  
の親着たりわろ教じありとて信西漢

三度礼一一種くればおおとてきりまは信西  
我國乃玄素なりてけをもひ記をそり一多れ  
ハ君と始めあうせて供養の人とみまうきあ  
思ひをあられ多りまゝ保元元年の表乃より  
比叡山へ清筆する山門めい大師修禪是れ具足  
とも名字をねたつ子ありきり一太歳也云  
家の戈字をうらんとかゆりひきん我山乃賊  
まてらんたまうく名字をあらうりあはひん  
と一同り中多れハ法皇元年然壁より伝西  
ふしき乃戈字とゆりひしりしりあまきまて  
しりうらんとかゆりあまきまて然る



長より先一乃教の修禪定なりと云くの中より  
さひ手鞠をうりてをとり物あり是ハリ  
小と修禪のまきさじんきくと云ひ心觀の并巻  
るし忍よりなり人々大帥禪定なりとき縁ありあ  
れしあまを項よりしをく縁ありをのしり  
をのれつまきを著ありありゆへに睡さむあ  
也又二尺に五寸よりなり本れさき又勢大棟  
よりよりにししてやりりなりそのあり大帥  
修禪定此時よりなりきまなりしをせいに  
をりておきふをさふまきやむ是を縁杖と云二  
尺よりありあまの法にせのことと云にらるるてふに

いふふぬ法にけりなりたふそのあり大帥  
禪よりし法に縁ししにじりきあまをとりてさふ  
さふまきやむ助老と是をとりお又縁ししに  
そのありを名を歌ふといふしりくも梵經  
に忍よりなりあれしをに縁し物とりふなり  
凡乃教ハ下野國宇佐文の法なりおさあら  
し法に使えたり明神ありあちふなりしに  
を人さいうてりありへきあれしも或字を  
法をこめ或陀天の法とて免大帥手巾をりて封  
せらふと云ふ不現諸索人皆乃念珠をけしこ  
ありと云ふやと云ふ延暦五年大帥氣初ハ伽藍



里大薩雲ハ深草天皇乃此教延命院曰王院ハ又  
酒米蓋此内教ナリ此教蓋ハ大師三代ハ清經  
とす——また五疊山の番ハ大清涼山の法王もわ  
里最唐院ハ大師の法王とくあり——  
もあり此教とわす——また其ノ子弘仁三年ハ  
ちり大師九別字佐乃宗にまふと此教の真文を  
——し——此ハ——大菩薩見り——秘教をひ  
らき手伝わり——大師ハ此ハ此ハ此ハ此ハ  
けさ中ハ光明く——八幡三所とおそ  
——ちり天竺此た——よう此金和尚の獨站  
燃燄地獄あり——人——人——人——人——

あう——あう——あう——あう——あう——あう——  
新ハ新ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ  
うり——うり——うり——うり——うり——うり——  
と——と——と——と——と——と——と——と——  
中——中——中——中——中——中——中——中——  
里ハを——里ハを——里ハを——里ハを——里ハを——  
あり密教とく——し——し——し——し——し——し——  
山ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ  
いの目ハ——ふ——ふ——ふ——ふ——ふ——ふ——  
二ハ二ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ  
み蓋六と中ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ此ハ



しうりて朱三朱三とりふくそふ故孫中達と市  
だつ子作へしとやされをまはは法皇きふりて  
て信あめめされてはうしを信くこさ進まれを  
さんひひりし一因し重三重四とつけのを唐  
の玄宗皇帝と楊貴妃と嫁六をあらうりしきんよ  
重三乃月り夜月とらんり思ふしうくしりお  
こしひふ位ふさひしとてあうもしり多れい  
重三村里を楊貴妃又重四乃月張あふて我公の  
こととに張里たらをももりふ位ふさひを  
とてうり給ふし重四おたりきよて天子は信  
言あし因しと五位りしきんてあされきり

となふなりあうししすきやうふふ位は  
せきいをさきいとて重三重四乃月に朱とさく  
まそよりこれひし朱三朱四とよりふとことと忍く  
ていへとさうあけねを信ひみことしうりあや  
さうんししあられきんさきん凡人あうぬよや  
死して後と手あけ日記とこいげはめい筆をぬ  
くは突魔乃魔すても重三の冥友なりつうりり  
きんと人のゆめふもみこ里よりあうりふ人の  
しうしうひと獄門ふけらうく之保え乃かざん  
り宇治の悪方府に清基大和國うふりとのこ  
りり河上村殺あ壁乃五三味うりししを信死乃











あう及代乃名もまさかあはれなるふとら思ふ家  
貞と意なるが執後守六り乃内一門もさうそ木  
かほりあふに用一めをらんいつせ給へと下  
せは清盛もあうあうしとてこもこ張うて  
引り色も大拍以下みる津衣乃う人ううあひ  
をき敬礼態聖控現今交の合我ことゆ人さくう  
らあささせ給へと祈精して引けくう所か  
らふ和泉と紀伊國とのさうひうう鬼井中山  
まああ一毛るりるり衆うう者人やると母か  
しとて標小をうてお衆たりすも愚源たり所り  
ひもとみる人色張ううふり源氏乃役あひ

わう張うて六りうりの早るまりうて六り  
いふふとくひ給へい暇自衆事ううり小おはし  
またい仙事一とひりた標慶中お衆のたのこて  
所うこまひしと内裏にるは意あるとてしきなこ  
りめされひしとひひいあうあう十目乃くれ  
りこりしうう衆ううせ給ひてひとやくれそ  
お衆の佐しき小云うひる記しとせうまい人  
くうな衆衆張うのみて衆まう人まできう手へ  
まこすとりお事一やあううてお衆あり勢  
川さるんやとうりうられきううてと愚源太り  
衆部整りうまうといおさいあよとどひ給へと



其儀ハうつて以て以て伊勢國併友乃兵もいと  
於へいらせ給ふく御代仕とて三百余騎  
とまら給ふせ以てとやせを款代源太王て  
いあうすしてよき思ひこころんみれうてや  
そのともてみる人色をあらしてまればたふ  
とすくびれくは和泉國大島乃文よつさ給ふま  
盛秘藏せられまう飛廉毛とりふるよ白鶴おひ  
て神ふるよむき給ふて清盛一首乃ああり

のひ子うより色里りてまもらひにけり  
こころうてよめふくりの神内裏より同すの目  
よふ心金藏とてとよふられまう勸修寺左衛門

盛光親心は程も信頼心ゆりまひる分るりて  
不衆すてたりにまうの衆肉して取らんとてこ  
とふあさ口うまう衆帯ひきけくひの荷給ひか  
うにちをまうやうふも此給ひ乳母子のう  
つる乃なる先範給ひまうふりうさ衆さ世難  
色のあやうきうかうて世難乃くそあ  
らも人もよくまぬらまうけて光頼りくひ  
まふりうきとれとて流るるくをま其外きよ  
けるり難きに五人めうて大軍勢を張て取  
こ門をうきう守護志まう成るま世にた  
たりうあふれをせりり給ふま兵共もたきふ



おろきなりら減ひくめ矢をうとめくとす一尊  
不震震あつて一乃減ちてあ上をめぐりて足踏  
へて伝教一尊して其座の上薦にり皆下よそ  
流くれくろ光教にあらわしきふ事一かな人い  
いふゆりまふともあまの右衛門様ゆきまをた傳  
の燈あれをあらわし流くす一と物押と思われ  
くれも方々并宰相長方々末座乃宰相すてれと  
一きりよけふ乃伝教座一とよに志とけあふ  
忍くくんと色代してあつくとあゆみ伝教の  
の上りむすといき終ふ光教のたあゆけ母  
方の伯父るらん人たか乃剛北人なれいことよ

おろきなりら減ひくめ矢をうとめくとす一尊  
不震震あつて一乃減ちてあ上をめぐりて足踏  
へて伝教一尊して其座の上薦にり皆下よそ  
流くれくろ光教にあらわしきふ事一かな人い  
いふゆりまふともあまの右衛門様ゆきまをた傳  
の燈あれをあらわし流くす一と物押と思われ  
くれも方々并宰相長方々末座乃宰相すてれと  
一きりよけふ乃伝教座一とよに志とけあふ  
忍くくんと色代してあつくとあゆみ伝教の  
の上りむすといき終ふ光教のたあゆけ母  
方の伯父るらん人たか乃剛北人なれいことよ  
おろきなりら減ひくめ矢をうとめくとす一尊  
不震震あつて一乃減ちてあ上をめぐりて足踏  
へて伝教一尊して其座の上薦にり皆下よそ  
流くれくろ光教にあらわしきふ事一かな人い  
いふゆりまふともあまの右衛門様ゆきまをた傳  
の燈あれをあらわし流くす一と物押と思われ  
くれも方々并宰相長方々末座乃宰相すてれと  
一きりよけふ乃伝教座一とよに志とけあふ  
忍くくんと色代してあつくとあゆみ伝教の  
の上りむすといき終ふ光教のたあゆけ母  
方の伯父るらん人たか乃剛北人なれいことよ











りたゞりて累家乃健名をうゝまらんこと也  
を一かふる一太武清威の然聖衆祐をどけす志  
て切目乃高よりもせのふふらんわ和泉紀伊國  
伊賀伊勢乃衆人ふまらうけて大勢まであらん  
伝頼りわあらん乃つて者りくくあらし  
平家の大せいのをうゝせてせめんあけ時刻あや  
めくすきり又あふと強うけまを君もい  
うてり安穩はほらせ終あへき原頼北地となり  
たらんたあもね家乃清あけきらんやういふい  
らんや君はうもる自然乃うもあらんハ天下  
乃孫事王乃れ憾七けとさるありへしし右

清の體之沙通ふ太小事をやめくふらんとく  
安ゆきあひりまふく隙をうめくひ玉神はく  
うめくたりまふやうは思案せうふへさて  
主とをいはくたれうまふらんとの清取は  
上皇ハ一弟讀書所り内侍取らんめいてん  
り一勅書といはくまふらん乃れくふと右衆の  
清次方りだつ子供ひたれを初當りうこうと  
へられまふ又お餉乃あ小人抑との一擲取は官  
り人けの志はくふ小者そと盡へんうれは  
右清門體すく作人ハ其方さゆ乃女房あくと  
けつひいらんとやさきまふ光頼つきくも



あへて世乃中も今ハううにさうなれ主上の目  
たゞせ給ふへきお餉ふは信頼臣君より思戸北  
所所ようはうきあう世たなり末代なれとてさ  
り日月わいまた地は落給ふね地を天照太神正  
八幡ある王法とけりうふまりりけひわうう果  
國ゆけ加振のためしむとり色とて我給ふい  
いまさうくわうとき先の蹤をきあひ前代未だ  
の不思議かきとてわうくあけはとて明の所  
をさくえどき給ふは怪方人もやさくうやや  
ふふささうけあうううまたれとも且あうふ  
しひてまれりうううう商業うううてうう世よ

むまれあひうきとをのこさくうや首の軒  
中より様とて北内裏乃ありさ海をきうん  
實ハ耳をも同おえのうひぬるううとゆるとて  
上乃さぬ乃うてあがふううりあうれきり信頼  
乃座よりあせうれし時あううもゆくうを  
思ひけひう君の御事一減かあひてうりし  
かきそそお給ひきう謙うう漢給ふ軒中ハ昌貴  
の事一減きうてたふああういざひありあ  
りゆ人うりあうき事一とさうたりとてみくと  
あうひさうふいもんやば光頼ハお家乃諫臣と  
して懸逆盡るハゆうきひを思さう給う耳目



なむめらひぬるくけりひねふそくともりなり  
たとへて帝堯天子のころ井り一にりまにこ  
と七十年治りてとて小老て誰より天下をゆ  
けりるまゝて賢人を治たり子よりまゝふたは  
みまゐつゝひて皇子さいもひるなりまゝ丹  
朱よりとけりあめ治るめとやせき堯の意もく  
天下を治る一人れ天下りあらぬふれりて  
太子あれはとて地獄ふさけけてお民をくらり  
まゝむつゝ丹朱とまゝりて九人の皇子ひと里  
としてを愚にならけりてあまは賢人をくろ  
祢新ふは箕山の中小許中と云ふ方をむさめて

くらねぬたりとまゝりて勅使張りて治位  
をゆけりつゝまゝりてけられたりまゝり許中  
はるゝ勅書をたふす寸割富貴を棄のこゝを  
きりてけりまゝりて潁河乃水まで舟をあゝ  
ふ所り一田山中一ふ谷中せらるる巢父といふ賢人  
舟をひつてけけりありあを乃まんゝまゝり  
り耳張あらしとみてゆ人をとふり其趣張か  
ゝり巢父りいなく賢人乃世張道あゝハ田生ま  
乃あゝりといへりけりまゝい保き若けりき如に  
うちまゝさあゝりも乃前一上りりを使あ  
さまはた家乃梁あもいへられ工代あまともり



ふゆるらんら世とのりまんとをもてくたは  
深山よりあうこころへきふるむと年ふれ極  
まゝとて制するとも獨て忍くはあけられそ  
かりあうきまゝとてあゝとて死しと別  
わたりけつる信頼つゝ小うてふあひさ大  
冠小うて見られてひゑり天子の侍梅りま  
ひ乃しゝるり大氣清感ハまゝいまりの社  
しありをのくもきハ枝枝ありてふらひハ神  
うて六波羅へそ川さりきつ大内ふれさ  
めて今世やよせんすらんとてふのをく  
めくまらわらひあられるふハ食祿をるに

大内関白太政大臣仲實大臣伴通云己下台衆  
同し沙へ里毛ハ少納言入乃ハ子息僧俗十二  
人乃罪をのく定めしとまんためり大内  
伴通云此とめしとまきりりよて死罪一等  
減減してを流しとせしと執儀ハ伝記を留め  
られ僧を度縁取と還俗せしとせらるまの  
新宰  
お後憲と本雲國橘麿中将成憲ハ下野國石中井  
貞憲隠岐國義隆少将長憲河波國信濃守隆憲ハ  
安房國法眼津憲ハ丹波國法橋寛敏ハ上総國大  
洗野勝憲ハ安藝國沈憲ハ信濃國憲耀ハ陸奥國  
常憲ハ伴鎌田明通ハ越後國と定められき



うの後窓ハ鳥羽院より表生を苑中とりし勅詔  
と歸て悲清濁の嘲十年風番上林苑鳳成貯心露  
とわくまゝう手改又ぬよして流雪は是を流こ  
へきり沈窓の記流ふけ龍神も感りし余も甘露  
の面とあらしし時通乃菩提心をいのりし爰  
のまゝうめい寶蓮苑にいてううふありす人々  
これ一門よりむすべふあゝ人ハわやの女房  
ういゝうまそて戈奪人よりあえたり同女三日  
大内の共々も六波羅よりよふらとてさる紀の  
まともその儀もあり想して十日より重目ゝ敷こ  
う六つうめい内裏よりよすうとてひゝめさ

大内より六波羅よりよふらとて兵とも右健友  
健友ともせらるひ源平あ家乃軍兵ホ京白河より  
健友もくくもよふられんとされとて歳末  
年始乃くくもなまもなまとたく合戦乃評定  
しうりより女六月乃秋あけて薙人右少弁成親  
一品後書所へ衆て君ハいつく松原めされは世  
るまと束れわけぬさきりみさふへきまては  
經宗權方も中いゆむ祿るはり民や幼輩も他  
所へあゝせ給ひぬ煮きりつうこへと清雪あゝ  
せねりしとせとそうせられられ上皇御とろ  
うせ給ひて仁和寺の方へいそかれやめう











れも二条院沙汰位の始ぬとて十セリあり  
給ふ人龍顔りてよりうのくもたりに  
まゝなやうなり法衣ハ多きなり禪りと思  
もまゝふとより乃女房小忍もさせ給ふ中宮ハ  
にりまゝいりてう忍とりめもくむ故うくと  
まゝよりうせきり清盛の良等伊賀氏志家深黒  
系柳く此股巻のう人よ小法きて難色より人  
飯を房貞康より草乃後まきの人より牛飼の  
あやうそくして法より後代仕ふ上東のより  
里よりうのく此やとてあまき法門をとより  
しゝゝは初きよりあまき法門の守り盛常

陸守皇盛二面給騎して法門東洞院に侍りけ  
なり清車ノ前殿守護して六波羅へいりけれ  
なり多れことあるく初きよりてきまけ平家人  
のいさ思ふよりあふくと法りなりやうて法人右  
が并成程をりて六りを皇居とあられなり初  
款ありしと思ふん案をうきとせ衆也とま  
ふとあれらまきれハ大なる園白なる法大臣大  
臣内大臣已下ふみなる人わきもくときき建  
たり内裏へとあゝあゝてつせ法りり兵せは  
よりときてまゝなりふといとききあり多れ  
六り乃門前ふなる法りのうちよりなる











うて新章ハ六リ〜へ旧章ハ仁和へと取里の  
よりふふとリさきれふさきれ〜つ〜これ  
〜き〜つ〜とも右邊門跡乃方ありもいま  
何れにけふさきさきあり〜源氏乃ありひん  
加らりやあつ〜きこもろ勢をあらせやとて内  
裏乃勢をあらせられけふ大將軍少佐源太衛門  
盛信頼子息新侍盛信親信頼の舎兄長頼大輔  
基政民部卿少輔基通卿と〜の尾張少将俊俊  
其外伏見源中納言所仲越後中將成親治子卿  
通伴源前司俊長壹波守貞知但馬守長兵衛  
頼政中納言前司光泰伴長光基河内守季実子息

右邊門跡季盛一門少佐あつた子頼  
倉源太義平次男中納言大史長頼長三男右兵衛  
佐頼新義頼の伯父隆興六郎源義頼乃頼と  
と新文十郎義盛後子乃俊俊式部大史重成平賀  
四郎義盛高木少佐鎌田長清政清後長兵衛基  
依木源三郎義盛四郎大史目本男ハ義朝少佐小  
男なれと〜り男とのがら孫も家子高等〜  
の介以三河關恒人小名重原兵衛父子相模國小  
ハ俊俊次郎義通意次良義院山内源義朝子頼俊  
通其子乃院口俊源義盛關山内長升俊友外高実  
盛基通六郎太史院頼俊小平六郎源義盛長次良基



実平山戎者所求金子十石家忠是立たる元を  
元上総ゆ八郎弘常豊陰関少八関以爲時負上野  
國少江大胡大新大親を所信徳國ふり月相小八  
良大吏京重本当中太孫中大常盤井持族戸以良  
甲斐關より八井津回良信京と始ゆとしてむ孫と  
此共二百人ありあさうふ軍共二子餘騎とそ志  
あさききり六りりり皮軍よりときとてくれ  
い人々物具せしきより悪石傍門餘信親を赤地  
よりきりひとたれり一雲をう所の鑑より菊の  
袂金物おころりこころひくりのうりとそ此  
白星の果よりくちあさおころをぬくひりき

句一雲震殿の額乃るり一虎をうけしそ各給ひ  
きり生年一廿七太北男のめよりさり義繁乃武  
具此雲新ひたりそのあはれとあき祥とそ心  
これ大物やとそ思ひたりきりるい奥列の基衝  
り六甲一れたるそ秘蔵しきり沢院へあき世  
きりりりりきりるのふくはくまきり八寸  
あきりりりりいりけ地乃きんあきりんれ鑑  
おひり方座の鑑比本乃りりり東りりり小引  
うて六里越後中ぬ成親へうんりのりき北並  
あきりりりりりりりりりりりりりりりりり  
あきりりりりりりりりりりりりりりりりり  
あきりりりりりりりりりりりりりりりりり



そまけふちう足毛うらる小白依梅乃鞠とひて  
伝教のる乃南と回うら小引うたり成就  
今年一廿四歳嘗儀しくう人にまきまてう見  
えられけふ武士の大將たる頭取おハ赤池のふ  
しき乃ひとなれよくろ糸おのふらひり  
歟うとおうろ五枚甲のをくおめりり物伝く  
のうちをまき黒羽の矢員あさき乃ゆこりて  
黒羽毛うらるうくろをうせて目範に  
う到たてうらと一廿七歳うつたう  
自銘の人少佐かもうたり嫡子勲源太義平と生  
年十九歳禰りいり乃魚渡の重安うハ鞠とて

胸板と鞠をハつうてけけいり體とまてたうを  
見れうふとの結をま免るき里といふたうをま  
き石抄乃矢をひ室友のらりて麻毛るりる乃と  
なりまきとふ小鏡くおうせて又乃ると回  
らうひとてたり次男中太史重お長と十六  
歳くらり繁乃重安う人をもたうとて澤をとあふ  
またふ重代の體小由星北甲をきう寸ふとりと  
いふたうとまき白薨小あうとりの眼までま  
いり矢員重安北らりてあうりるふあろ  
農由北鞠おひて足乃るにいうへてまき  
うれと男太史重安依おハ十三うんれひた



源太り産衣とりふらひおき白墨の甲の  
縁を止め懸切とりふらちをもち十二うら  
そめ羽乃矢おひ重友のゆゑりて粟毛うらるゝ  
柏みくけくまうらうら鶴をひてあまも一羽  
ひうてたりは産衣懸切ハ源氏乃重代ハ茂具乃  
中ふくとり秘藏ハ重寶よりハ幡表のねさま  
ふを源太とう中けり二歳乃時院よりあつせよ  
源氏と伝説ううあり終ひてわさくよりひ  
とねく神又すくそきんさん入られき  
うてく源太り産衣と皮付けられ胸板ふ  
天照太神正ハ幡表菩薩といわけあつせふ心の  
うてあは友のくふれ咲あつたふら海城おと  
せらるりうて懸切と下ハハ幡表貞任宗任をせ  
められしとき度くまうけくうふ十人のくひ  
とう川よりみるひげとくそきききまひひけ  
きりく皮を付けたり奥列ハ任人又勢といふ銀  
箔ハ化まり骨より嬌くそくお傳せりうけ魚源  
太あうけく人終ふつきり三男あれくも親親  
さうりうけひまらハけぬ源氏ハ大將とあり  
終ふるきあらしきりあき傍依又美智のあさを  
思ふくして平家やちやひうひぬくや人ふら記  
残せくまらうりあつたへくせいんちんち



されきりハるろんふときこそしし鳳凰を卵  
の中よりして超嶽乃りきかひわり龍の子ハ  
いふとり色ともよくぬをあらすどとがやう  
の事一扱やアつき比を平治元年十二月廿七日  
乙卯乃刻よりハことなるり一唯白乃雷をえ  
海り越上をたすをくくくくくくくくくくく  
目乃ひり映徹して器具乃りみ物めく登きわ  
たりてことくに優ふそ忍むたりきくをよそその  
ことく天竺震旦ハそをあらす目ハ我物り  
をひてハ我物乃一教ふ海さふへを武士をあら  
へとも忍むさうきりあら教ふ教政光泰光基

もあらるるりしして忍むたれを我物うこと  
やとをもつれたれうを大事一の海人乃小事  
てきり利をいふふくならハ取ひひとくま  
里路ひたり義州意ひきくくと夜の合戦り  
ちまけるは東國へらせくし里ハケ國の家人  
もよや一あつめてくし孫てきやこりせあ乃  
りり平氏乃いちふひとやわがさんとなふ乃  
子細りあうへきとやさきしうもび人ハみま  
保えり一扱かく乃たとうと女とあらがものこ  
あしひまさうくちくれくひ城もほし人なま  
あしひあまやうん乃きそめみらんと肉くや



さまげのうきと六つうー新章なりぬとやい  
しのおちを好歌とるりるん事一代かろーひて  
清おふけみるあくろかろりせうまきろるりこ  
まてふりまきぬいきふくはるてのち六つうよ  
里わうちとてうけひてきろろろーとむ名と  
い源兵庫頭とよりまろろろ云うひろく併勢平  
氏ーつさけふとのろろ清るんろあさろろよ  
よてあ歌のゆと矢ーろろつはさねろろとくら  
きーくれとツひろけうれしむ事ーろ累代  
ゆふ集乃げふとーろろとす君はきえろ  
付もろ清るりのふろりとろ目かーろふろ  
にーろ同さーてあやまろをろろためぬーと祿  
ろーあ歌の心辱あれとろろれきろろろ

平治物語卷上終

後号終

武に子守



10X  
403  
3  
1



Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in several lines across the right page, with some characters appearing to be circled or underlined. The script is dense and difficult to decipher without a key.



